



わけあって

色んな友達に手紙を書いていたんです。

10通くらい書いたところでフと思ったんです。

これ

面識のない第3者が読んでも

面白いんじゃない？

むしろ

第3者が読んだほうが

面白いんじゃない？

これが噂の

『個をつきつめれば全に至る』

ってやつかしら？

全ての人を対象にしたものよりも

一人の人を対象にして創られたものの方が

逆に

全ての人に伝わる。

噂のそれが

この手紙の中で起こってるんじゃない？

個人に向けて手紙を書いて

面識のない第3者の魂をユッサユッサ揺さぶる。

そんなことが  
もしも  
もしも本当に出来たら  
それはもはや

『魔法の手紙』

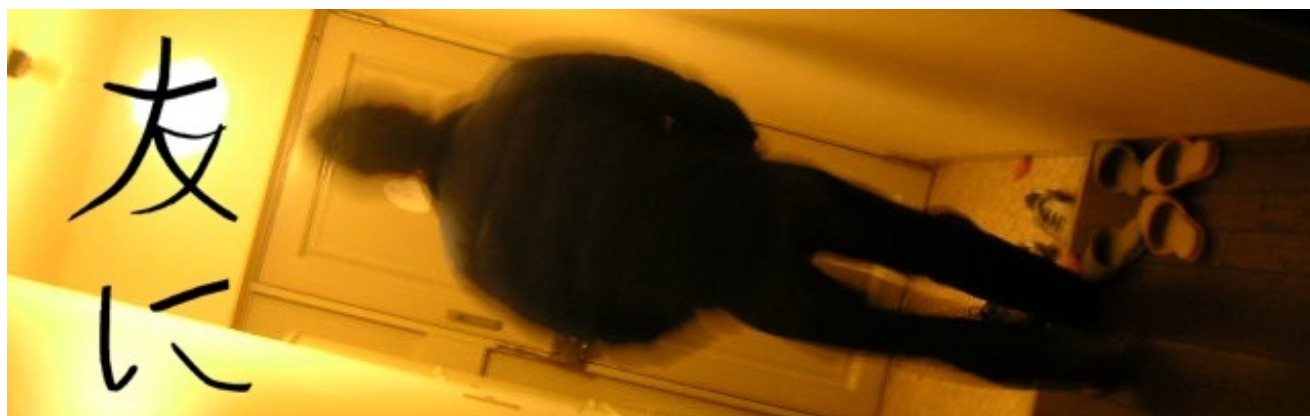
と呼んでも過言じゃない。

書いてみたいな  
魔法の手紙。  
書いてみました  
魔法の手紙。

果たして  
ホンマに  
魔法の手紙となったのか。

悔しいけれど自分では確かめられんです。

どうぞ読んでみてください。  
おねげーします。



よう、ブンちゃん  
久しぶり。

最近はおまえがバイトで忙しくてあんまり会ってないな。

元気にしとるか？

おまえとは

小学1年で一緒のクラスになってからの付き合いやから  
初めて一緒に色鬼してからもう20年以上たつねんな。

そんだけ長いこと友達やってると  
くだらん思い出も腐るほどあるな。

ドブに落ちてたエロ本を拾って取り合いしたり  
公園のベンチでいちゃついているカップルに  
カチカチの犬のフンを投げつけて逃げたり  
彼女にフラれて泣きながら電話してきたおまえを  
チャリで駅まで迎えにいったらもうヨリ戻ってたり

ホンマ

数え上げればきりが無いほど  
青春チンパンジーやな。

友達歴がそんぐらい長くなってくると  
学校バラバラになって疎遠になったり  
一緒にバイトに入ってやたらと遊んだり  
山あり谷あり  
花あり蟹あり  
おまえに対して  
羨望やったり軽蔑やったり  
喜怒哀楽どころか  
108ぐらいの  
複雑怪奇な感情をグルグルと駆け巡らせたで。

その長い付き合いの中でも  
おまえが同棲してた彼女を妊娠させたのに  
「まだ遊びたいから」  
って理由で中絶させた時と  
クスリに手を出して  
他のツレにも一緒にやろうって  
誘ってたことを知った時には  
ホンマおまえに嫌気がさして  
こいつはどこまでアホなんやろうと思った。

中絶なんて人殺しと一緒にやし  
クスリやってイイ気になってるなんて  
タバコ吸って調子に乗ってる中学生よりダサイ。

真剣に友達やめようかと悩んだわ。

でも  
心の中で  
おまえのことを散々非難した後で  
で、そういうオレはどうやねんって  
自分のしてきたことを振り返って愕然とした。  
オレもおまえとたいして変わらん50歩100歩。

今まで  
たくさん嘘ついて  
たくさん奪って  
たくさん見捨てて  
たくさん殺してきた。

最低やと罵っていたおまえと

なんにも変わらん屑人間。

どたまを勝ち割られ  
絶望の大波が押し寄せましたわ。

どこを探したって  
オレにおまえを罵る資格なんてないねんから。  
正義をきどっておまえを罰しようとしてた自分が恥ずかしくて赤面しましたわ。  
色んなもんに許されまくってきた自分に気づいて  
泣けてきましたわ。

それでも  
おれにおまえを非難する資格がないってわかってても  
やっぱり許されへんもんは許されへんし  
ムカつくもんはムカつく。  
正直、心の中にわだかまりは残りまくってる。

今でも一発殴ってやりたいぐらいの気持ちは  
十分あるよ。

だけど  
悔しいかな  
ムカつき腹立ち  
悩んで  
憎んでも

やっぱり

オレはおまえが好きなんよ。

だって

オレはおまえのいいところいっぱい知ってるもん。

どころか

オレはおまえに何度も救われてきてんもん。

学校を卒業して

会社に入って働き始めて

世の中には想像してた以上に

色々な種類の間があることを知って

聞きたくもない悪口を延々と聞かされたり

肩書きやら権力やらを振りかざされて

見下されたりナメられたりで

いいかげん

なんにもかもにうんざりしてきて

心がガチガチに固まって

なんにも感じなくなりそうになってる時とかに限って

おまえから

「おい、なにしてんねん！おまえそろそろオレと遊んどかなあかんやろ！？」

なんて

なんでもないメールが入ってきて

ホンマ

なんでもないメールなのに

涙が出るほど嬉しくて

擦り切れそうになってた心が

なんとか持ちこたえる。

そんなことが何度もあった。

オレはおまえがおらんかったら

アカンくなってたと思う。

ホンマに。

おまえは見た目いかついくせに  
中身軟弱で  
夢は追いかける前から諦めるし  
約束もすぐ破るけど

だけど

でも  
やっぱりオレは  
おまえが好きなんよ。  
人間を

白と黒にはきっぱりわけれんのよ。

おまえは  
最低で  
最高やもん。

情けない人間にしか出せない  
優しさや魅力が  
おまえには  
いっぱい詰まってるもん。

おれもおまえもあまちゃんて  
いちいち社会の常識とか粹とかに



うまくなじめんくて  
エリートさんから見れば  
いわゆる落ちおぼれの屑人間。

だけど  
だけれども  
オレはずっと信じてんねん。  
屑人間のみぞ知る喜びがこの世にはあるってことを。

屑人間が見せる  
なんともいえない最高の笑顔をたくさん見てきたから。

屑人間には屑人間なりの  
ホームランの打ち方ってもんがきっとあるやろう？

打ってやろうぜ。  
常識の枠では計測不能な  
屑人間の場外ホームラン。

このままナメられっぱなしで終わるのはやっぱり悔しいやん。

っておまえを挑発しても  
おまえのヤル気は3日で雲散霧消  
いつものパチスロ生活  
まいどおおきにモーニング。  
ってなことになるんやろうけど  
まあええわ。  
それはそれでおまえらしい。

生きたいように生きなはれ。

とりあえず  
おれはおれとして  
今まで通り  
色んな想いを抱えて  
おまえにぶつかっていきます。

これからも  
どうぞよろしゅう親友さん。



もしもし  
猫さん猫さんよ  
どうしてあなたはそんなにかわいいの？

あなたを見てるとかわいさのあまり頭がムズムズしてきますよ。

なんすかその肉球。  
いらんでしょ、それ、べつに。  
ムニムニかわいすぎるでしょ。  
ひきちぎったるか。

後ろ足でゴシゴシ頭をかいてから  
あくびをするその仕草もかわいすぎるでしょ。  
むしったるか。

おれがもしもアイドル目指してる女の子やったら  
あんたの愛嬌に打ちのめされて  
武道館コンサートの夢諦めてますよ。  
ホンマに。  
ええかげんにせえよ。

こたつで昼寝をしたり  
近所の人に勝手に忍び込んだり  
ちょっと淋しくなったらすりよってきたり

自由すぎるでしょ。

自由だなんだとワイワイ叫んで  
主張してる自分がアホらしなってきますよ。

自分が自由かどうかなんて  
まるで意識することなく  
のんきに生きてるあなたを見てると  
自由の最高峰  
自由のプロフェッショナルの姿を  
見せつけられた気がして大敗。

あんまりにも悔しいから  
我が家の前で  
ゴロゴロと白い腹を見せて  
転がっているおまえの隣りで  
成人男子もゴロゴロいったろかい！！

と、思うのだけれど  
万一  
近所の奥方に見られでもしたら  
一発OUT！  
たちまち近所で噂が広がり  
やがては親の耳にも  
“長男屋間から猫と道端でゴロゴロ事件”の一報届き  
ママンは目頭おさえて  
受話器を手に取り医大にテレフォン。  
頭の中身を検査する病院に入院。  
薬に漬かる。

なんてことにもなりかねない。

いち社会人として  
ここは断腸の思いで我慢の一手。

部屋に戻ったら  
皮擦りむけるくらいゴロゴロしたるからな！  
と訳のわからぬ負け惜しみをつぶやくので精一杯。

そんなオレの屈辱を知ってか知らずか  
あなたは相も変わらず気持ち良さげに  
アスファルトの上を  
ゴロゴロコロコロ  
飽きたらあくび一発。  
ミャーミャー鳴きやがる。

ああ  
猫になりたい。  
猫になって  
あなたとじゃれあいたい。

なんて嘆きつつ  
この前、実家の門をくぐると希望の光が差したることこの上ない。

玄関上がって  
居間の戸を開けるやいなや  
オトンオトン  
うちのオトン。  
164cm・73kg・65歳  
南国生まれ関西育ちのうちのオトンが  
夏で蒸し暑すぎたのか  
上は裸で  
下はステテコ一丁

それを膝までずらして  
ケツ丸出しペロンチョ  
うつぶせ  
いびきをかいて寝てはりました。

その寝姿たるや  
もうトド  
まるでトド。  
どうひいきめに見ても太めのトド。

人間を60年もやっていると  
ここまで無心で寝れんのかと驚嘆！

その寝姿たるや  
猫さん  
あなたの自由と同等でした。

父は息子に  
人間だって猫にも劣らぬ姿で寝れるんだ。  
ということを  
ケツ丸出しで昼寝している姿で教えてくれました。



気に入らない。

おとんの考え方が気に入らない。

「自分のやりたいことをやって成功できる人間なんてほんの一握りや。

あきらめるんは早いほうがいいぞ。」

「今の時代、技術や資格がないと職ないぞ。自分の売りになる技術を身につけろ。」

晩飯時におとんはよくそんなことを言う。

世間でもよく聞く ごもったもな意見。

でも

気に入らない。

ちゃうねん。

ちゃうねん、ちゃうねん。

おとん。

おまえの息子はそんなところでつまずいてへんねん。

そんなところであがいてへんねん。

もっと前の前。

初歩の初歩で転んどんねん。

やりたいこともやらずに

手応えもなしに

毎日を生きていこうと思えるほど

この社会が素晴らしいものとは

オレには

とてもじゃないけど思えへんねん。

色々やってみたけど

生きてる実感得られることなんて

ほとんどなくて

心にポツカリ穴が空いたままで

あともう

自分の人生に残された可能性は

自分のずっと信じている仮説が

ホンマかどうかを

我が身を持って確かめてみるっていうことだけやねん。

あのな、おとん。

オレずっと信じてることあってな

資格なんかなくても

技術なんかなくても

人脈なんかなくても

触れた人の心の中に

愛より

もっと野蛮で

歓喜より



少し優しくて  
情熱より  
何倍も速い感情を  
ブチ込むような作品を創れたら  
人はそれだけで十分生きていけるって  
ずっと信じてんねん。

生活のためとか  
家族のためとか  
お金のためとか  
夢のためとか  
そんなもんは  
全部まやかして

生きる歓喜にのみぞ震えて

作品創れたら

そんなもんは  
あとから全部ついてくるんちゃうかって  
たどついでこなくて  
死んでしまっても  
生きる歓喜に震えて死んだなら  
死もまた歓喜に成りえるって  
そう信じてんねん。

というより  
そう願ってる。

そう願わずには

生きておれんのですわ。

自分なりに  
考えに考えて  
器用でも世渡り上手でもないオレが  
どうにかこうにか  
必死のばっちでワクワクしながら  
生きていくには  
その可能性に賭けるしか  
残された道はないんちゃうやろか。  
そう覚悟した。

でもな  
そんなに悲愴な覚悟ってわけでもないねんで。

昔からよく言うやん。

ピンチはチャンス

短所は長所

パンコは純情

こんな不出来なアカンタレもそうそうおらんやろ。

だから

きつといけんねん。

オレはオレであるだけで

価値のある男になれんねん。

っていうかもうすでに価値のある男やねん。

あとはそれを証明するだけ。

不遜ながら

正直そう思うてます。

こんなことを言えばおとんは  
「おまえは社会の厳しさをなんもわかってない。」

おまえみたいな奴は世の中にごまんという。  
そんなもんは甘え以下や。」

と一蹴するやろう。

そらそうや  
まだオレ、なんも証明してないもん。  
実現されない言葉は無に劣る。

だから  
勝負しようやおとん。  
ぶつかりあおう。

父と息子は  
ぶつかりあってなんぼやろ。  
逆らうことが息子の使命やろ。  
  
感謝することと従うことは違う。  
従うだけの子どもなんていらんやろ？

オレやったらいらんわ。

おとんは  
会社に就職もせずに生活するのはおまえには無理だと言う。

おれは必ずできると言う。

心地良き  
明確なる対立。

自分の全存在を自分にBET。

どっちが勝つか結果が楽しみやな！

「どうせ失敗するやろうが、やりたいようにやってみろ。」

なんて

懐深いところみせる

おとんの価値観に

風穴空けたろう。



トイレの壁さん  
あんたもなかなかしつこいね。

“この現実が始まりでしかなくて、この世のどこかに  
異次元につながる秘密の入り口がきっとあって  
その場所を突き止めて扉をぶち壊せば  
ガラガラと現実が崩れさって  
その先には  
今まで築き上げてきたものすべてを  
台無しにしてくれるような世界がわんさか広がっている”

小学3年生の時に  
そんなことを夢想して  
そこから  
異次元の入り口探しの旅が始まって  
千思万考  
知恵もなにげについてきた小学4年の3学期。

やっぱり異次元への入り口は神秘のイメージの逆について  
一番身近で俗っぽい

生活の臭いのこびりついた  
我が家のトイレの壁のどこかにあるんだろう。

という結論に辿り着き

その日にさっそく

うんこをウンウンきばりながら

なにもそんなこと考えてませんよ

排泄物を出すのに

1000000000000000000000000000000000000000%

神経集中させてますよ

って顔して

いきなり

ドンッ！

トイレの壁をドンッ！

ドンッ

ドンッ

ドンッ！！

しかし

壁は壊れず

入り口出てこず

手の皮めくれて痛いだけ。

“まあ一回目やし、まだ叩いてないところいっぱいあるからかめへんわ。  
もうちょい横やったかな。楽しみは後にとっとくタイプやねんオレ。”

と気を取り直して

それから

3日おき

3ヶ月おきくらいに  
トイレの壁さん  
あんたが油断したんを見計らって  
バッチバチいってるのに  
いっこうに異次元への入り口あらわれやがれへん。  
手え、ジンジン痛いだけ。

たまの収穫といえは  
トイレの壁の向こうの風呂場で  
湯船に浸かってたネーチャンに

「あんたさっきから壁をドンドンうるさいねんっ！静かにうんこしいや！！」

って怒鳴られてブルーになるくらい。  
そなん収穫でもなんでもあらへん。  
兄弟関係ギクシャクするだけや。

そんな思いまでして  
トイレの壁さん  
あんたをドンドンしてるのに  
あんさん全然壊れはれへん。

空気読んで！

マジで。

もうそろそろええやろ！？

オレ、今年で28やで！  
子ども二人おってもおかしくない年やで！！  
トイレの壁叩き歴18年やで！  
そこらへんも酌んで  
そろそろご開帳してくれてもええんちゃうの！

扉開けろや。  
たまらんわ。

そっちがその気なら  
オレもあきらめの悪いタチやからね。  
半分意固地になってるからね。  
まだまだやめずに  
死ぬまでやめずに  
じいさまなっても  
あんたをドンドンいくよ！  
長期戦覚悟や。

この勝負に年齢制限ないよ。

だから  
トイレの壁さん  
いつかこの切なる願いが  
あなたの心に響いたら  
異次元につながるタイルのそこだけ  
乳白色に輝いて。

そしたら  
僕は  
あなたを  
優しくひとなでしてから

ドンッドンッドンッ！





大木さん  
あなたは僕の憧れです。

川原を散歩している時  
あなたの前をよく通るんですが  
いつ見ても  
悠然と風に揺られてそびえ立っている。

その惚れ惚れとする立ち姿に惹かれて  
ついついあなたのもとへと足を運んでしまいます。

あなたのもとを訪れ  
あなたに触れ  
あなたに包まれていると  
人の波に飲まれて揉まれて  
乱れまくっていた  
私の思考の波は  
ゆるまり  
ととのい  
静けさをとりもどす。

あなたのそばに座って  
ボ～っとしていると  
ずっと来たかった場所に辿りついたような  
昔いた懐かしい場所に戻ってきたような  
不思議な感覚におちいります。

先日  
散歩の途中  
あなたの作る木陰に座ってとろけている時  
こんな想いが頭に浮かんできました。

あなたは  
私が生まれた時から  
ずっとここにいて  
私が  
小・中・高・大・社と  
少しずつ歩みを進め  
様々なことを見聞きし  
悩み、壊し、怒り、触り、怒られり  
恋に落ちては舞い上がり  
七転八倒  
フリ  
フラれ  
ブリブリブリブリ  
している間も  
ずっとここにいて  
誰かを拒むわけでなし  
なにかをねだるわけでなし  
ゆっくりと

その根を広げ  
あなたのもとで小休憩をとる人たちの  
心をくつろがせ続けていたんでしょ？

すげえなあ。  
なんてすげえ。  
それってある種の理想形。

パッと見あなたは  
樹齢100年はゆうに超えている。

ってことは  
ってことはですよ  
あなたはこの地で  
戦争が行われていた時も  
今となんら変わらず  
ことさら争うこともなく  
陽光浴びては  
空に向かって葉を開き  
世界と調和し続けていたんですよ？

誰かが  
「平和は個々の問題だ。」  
と言っていたのは  
そういうことやったんか。

初めて聞いた時は  
ちんちんぷんぷんだったけれど  
あなたに触れて初めて少しわかった気がします。

だってあなたは  
人類が殺戮に明け暮れていようが  
数字に溺れていようが  
なんにも変わることなく  
世界と調和し続けていたんでしょ。

あなたはここ何百年かずっと  
平和だったんでしょ？

平和はまず個々に宿るんだ。

ふうむ。

あなたから学ぶことは  
たくさんありますね。

ねえ、大木さん  
僕もいつかあなたみたいになれるかなあ？

べつだん  
なにをするわけでなし  
なにかを勝ち取るわけでなし

ただ  
大地に根を張り  
幹を伸ばし  
枝を広げ

そばに寄る者あれば  
そいつの心和ませる。

そんなあなたみたいになれるかな？

欲望の塊である僕は  
あなたのようにするために  
焦らずゆっくりと  
僕のくだらん欲望を  
心ゆくまで味わいながら  
ポテチを食べたり  
半ケツ出して麻雀したり  
5時間昼寝をしたり  
夜勤明けの彼女の寝込みを襲おうとして  
3日間口聞いてもらえなくなったりしながら  
あなたのいる世界に向かって  
少しずつ歩を進めていきたいなと思います。

あと何回か  
産まれて  
生きて  
絶望と希望を  
持て余して  
自分の可能性に興奮して  
自分の愚かさにくんざりして  
太陽も虫も人間もエロ本も  
なんだ  
みんなおんなじようなもんじゃねえかと  
心の芯の芯から実感して  
死んでいたら  
あなたのようにになれるかなあ。

大木さん  
あなたは  
僕の  
憧れです。



おまえってば  
夕食時に家に遊びにやって来て  
今日、幼稚園で覚えてたてだという  
じゃんけんを  
多分楽しすぎたんであろう  
そのじゃんけんを

「みんなでしょう」

って  
おとんとおかんに加えて  
寝ていたばあちゃんまで巻き込んで  
ええ大人に一日100回くらい  
じゃんけんさせて  
それでもまだまだ飽き足らんくて

獲物を探す狩人のごとく  
風呂場で湯船につかっていた  
オレのどこまでやって来て  
ドアからひよこっり顔をのぞかせ

「ゆうちゃん、じゃんけんしよー」

ってなもんで

じゃんけんぽん！

ゲーとパーでハルナの勝利！

「ゆうちゃんにも勝ったでー！」

っておそらく連勝記録を伸ばしたんやろうな  
大きな声で  
居間までかけてくはしゃぎっぷり。

じゃんけんひとつで  
部屋中に生きる喜び満ち満ちて  
おまえは  
いつも  
日々の煩雑さに埋もれて  
消え入りそうになる  
無駄で  
無邪気で  
無垢なる  
淡い甘い感情  
呼び戻す。

ありがとうすぎるわい！





この間  
新年早々  
西日を背に

部屋でゴロゴロしながら  
本を読んでいると  
こんな一文に出会いました。

「本当に出会ったものに、別れはこない。」

“本当に出会ったものに、別れはこない。”

だなんて。  
なんて  
その通りなんやろう。

本当に出会ったもの達は  
自分の中に居座り続けて  
心の中で

釜飯炊いて踊ってる。

こんな当たり前のことに

今まで気づかなかったなんて  
今、気づくなんて  
心おもらし  
パンツ湿りて  
困りに困り果てる。

魂に染み入るほどの  
出会いをしてしまったら  
相手が遠くにいようが  
死んでいようが関係ない。

別れはこない。

別れのこない出会いというのも  
確かにあるもんだ。

そんなことに今さら気づいて  
新年早々、放心状態。

心が自分に戻ったころには  
辺りはすっかり暗闇  
おなかがグウとなる。

おーい

かあさん。

ご飯まだかな？

ところで

この出会いは永遠か？

